

Title	フランス・ファシズムの思想と行動(2) -ドルジェール運動-
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 55(2) p24-p.42
Issue Date	2005-09
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/16854
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

フランス・ファシズムの思想と行動(2)

—ドルジェール運動—

竹岡敬温

1. ドルジェール運動の誕生

アンリ・ドルジェールは両大戦間フランスの農民社会の主要な右翼的アジテーターであり、1935年に公刊されたかれの本の題『熊手を立てよ¹⁾』が、その後のかれの運動のトレード・マークとなった。それはドルジェール運動の青年行動隊「緑シャツ隊」の月刊機関紙のタイトルでもあり、ドルジェール運動の演説者たちは、ときおり、このスローガンを大声で叫んでスピーチを締めくくった。ドルジェールによれば、「熊手」はかれの運動を象徴し、「われわれが建設したいとおもっている国家の基礎にある職業をあらわし、わが国の崩壊と名誉失墜に責任を負う政治屋どもを追い払うための武器をあらわして²⁾」いた。ドルジェール自身は熊手を握ったことはなかったが、しかし、1930年代のフランス農民の嘆きと怒りをよく共感し、それを言葉に移し替える一種の天賦の才をもっていた。

アンリ・ドルジェールは農村出身ではなく、農村で育ったのでもなく、その出自にも、その青少年期にも、後年かれが1930年代の農民運動の主要な指導者になることをおもわせるものはなかった。かれは、1897年2月6日、リールに近いノール県ヴァスクアルで、小さな肉屋の長男として生まれ、本名はアンリ・オーギュス

ト・ダリュアンといった。

父が長患いの末52歳で死んだので、母と子供たちは家業の肉屋を続けていくために辛酸を嘗めた。小学校では、アンリ・ダリュアンは成績の優秀な、意志の強い生徒であったようである。1908年、初等教育修了試験で、かれはノール県で一位の成績を獲得し、トゥルコワンのリセに進学するための奨学金をえた。かれが大学入学資格試験の筆記試験に合格した直後の1914年8月、戦争が勃発した。そのため、戦争による長い中断ののち、ようやく1923年に大学入学資格(法学)をえた³⁾。

1914-1918年の戦争の4年間、アンリ・ダリュアンはドイツ軍に占領されたノール県にとどまった。ドイツ軍の占領下、15歳から60歳までのすべてのフランス人は、市当局が発行しドイツ軍によって連署された身分証明書の携帯を義務づけられた。アンリ・ダリュアンはヴァスクアルの市役所から数枚の身分証明書を盗み出すことに成功し、それをリセの友人たち(そのひとりに警察署長の息子がいた)に配布していた。1914年10月、かれはドイツ軍に逮捕され、住民登録をしていなかったために有罪とされて、40日間の禁固刑を宣告された。1年後には、身分証明書偽造の嫌疑でふたたび逮捕され、20日間投獄された。1918年2月には、かれはオランダへの逃亡を企てたが、果たせず、ベルギーで逮捕された。

¹⁾ Henry Dorgères, *Haut les fourches*, Les Œuvres françaises, Paris, 1935.

²⁾ Cit. par Jean Plumyène et Raymond Lasiera, *Les fascismes français 1923-1963*, Seuil, Paris, 1963, p. 235.

³⁾ Clément Lépine, *La naissance du mouvement dorgériste, 1926-1930*, mémoire de maîtrise, Université de Paris-Nord (Paris-XIII), 1992-1993, p. 10.

アメリカの歴史家ロバート・パクストンは、——これまでのところドルジュール運動の唯一のまとまった研究であるその『フランスの農民ファシズム アンリ・ドルジュールの緑シャツ隊とフランス農業の危機、1929-1939年⁴⁾』のなかで——このときのオランダ逃避行について、おそらく南仏に避難していた家族と合流しようとしたためではないかと書いているが、のちに(1944年10月)、ドルジュールがヴィシー政権時代の対独協力の罪を問われて被告となった裁判(この裁判では、結局、かれは執行猶予付きの判決しか受けなかった)で、かれは、予審判事にたいして、このときのオランダへの脱出計画は連合軍のための情報を内密にオランダに運ぶためであったといっている⁵⁾。

しかし、また、1970年代に刊行された回顧録『熊手の時代に』のなかでは、ドルジュールは、かれが第一次世界大戦中オランダへの脱出を計画したのは、母と2人の姉妹が避難したあと、ドイツ軍の占領下ひとり残されたフランスの青年を待ち受けていた——ドイツ軍に動員され、戦線に送られるのではないかという——運命にさからって中立国に逃れようとしたからであったと書いている⁶⁾。なおまた、かれの家族が避難先として選んだのは、南仏ではなくて、パリであったといっている。このとき、ベルギーで捕まったかれは、ブルッヘの牢獄に監禁されたが、1918年10月4日、連合軍の接近を前にしてドイツ軍が撤退の準備をしていたとき、

脱獄に成功した。今日、この冒険の真実をあきらかにするのは不可能であるが、いずれにせよ、ドルジュールは、若い日のかれの冒険を第一次世界大戦時代の偉大なフランスの国民的叙事詩に結びつけたかったにちがいない。

1919年3月、アンリ・ダリュアンは『アクション・フランセーズ』紙に一連の4つの短い論説を發表して⁷⁾、ノール県における戦後復興が不十分なことを非難し、共和制政府のいきすぎた中央集権化とお役所仕事を攻撃し、「ドイツ野郎(ボシュ)」からもっと多額の賠償金を取り立てるよう要求した。未来のドルジュールの主要なテーマとなる反国家統制主義と(反ゲルマン主義)が、すでにそこにはみられたけれども、これらの論稿は工業を論じてはいたが、農業を論じてはいなかった。しかし、この王党派機関紙への寄稿の結果、アンリ・ダリュアンとリール教区のシャロスト司教との交際が始まった。若きダリュアンにカトリックの一貴族が主宰していたノール県の主要な農業団体、ノール県農業組合連合に職をみつけてやったのは、シャロスト司教であったとおもわれる。まもなく、アンリ・ダリュアンは『農業組合情報』紙の記者になった。

1922年、アンリ・ダリュアンは「アクション・フランセーズ」の地方新聞『ブルターニュの新聞記者』紙で働くためにレンヌに赴き、1927年まで、その職にあった。レンヌの大司教に任命されたシャロストが、ブルターニュで影響力をもっていた「キリスト教民主主義」の運動とたたかうために、ダリュアンをかれのそばに呼んだのであろうとおもわれる⁸⁾。

「キリスト教民主主義」の司祭たちがブルターニュの社会的安定の主要な敵対者である

⁴⁾ Robert O. Paxton, *French Peasant Fascism. Henry Dorgères's Greenshirts and the Crises of French Agriculture, 1929-1939*, Oxford University Press, Oxford, New York, 1997, (traduction française) *Le temps des chemises vertes. Révoltes paysannes et fascisme rural 1929-1939*, Seuil, Paris, 1996.

⁵⁾ *Archives Nationales*, Z^o 127, no. 5815, Cour de justice de l'Indre, Chambre d'instruction, procès-verbal d'interrogatoire, A. Boulade-Périgois, juge d'instruction, 10 novembre 1944; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 52, 196, (traduction française) *op. cit.*, p. 88.

⁶⁾ Henry Dorgères, *Au temps des fourches*, Editions France-Empire, Paris, 1975, p. 43.

⁷⁾ *L'Action française*, 3, 8, 11 et 17 mars 1919; C. Lépine, *op. cit.*, p. 13.

⁸⁾ Pascal Ory, *Henry Dorgères et la «Défense paysanne» des origines à 1935*, mémoire de maîtrise, Faculté des lettres et sciences humaines de l'Université de Paris-Nanterre, 1970, p. 30; C. Lépine, *op. cit.*, p. 17.

(社会党と共産党の活動は、とりわけプレストの海軍工廠や若干の漁港などの周辺部に限られていた)と考えたレンヌの大司教は、農村にたいするかれらの影響を阻止しようと決意していた。1926年3月、アンリ・ダリュアンが(『ブルターニュの新聞記者』紙の記事を書きつづけながら)農民運動の新しい週刊紙『西部の農業進歩』(1925年創刊)のために記事を書きはじめたのは、おそらくシャロスト大司教の提案にしたがってであり、1927年4月には、かれはその主筆となった。

けれども、『西部の農業進歩』紙の主筆となり、また、のちに農民運動の指導者となるドルジュールは、ジャーナリズムへのかれの進出を助けた宗教界の有力者にたいして一定の距離を置こうとしたようにおもわれる。ドルジュールは、その論説のなかでも、そのスピーチのなかでも、カトリックの教義や慣行を引き合いに出すことはなかった。かれの新聞も、かれの運動も、まったく宗教から独立的であり、ときには公然と反教権的な発言をすることさえあった。かれはまた、王政の復活についても語ることはなかったが、しかし、一方で、第三共和制が真の正統性をもたない過渡的体制であるとの確信を捨てなかった。

レンヌ郊外の村の名から借りた筆名を署名して『西部の農業進歩』紙の論説を書くようになったドルジュールは、活動的で、紙面の刷新に熱心な編集長であった。同紙には、どの農業紙にも載せられる市場の相場や技術的情報に加えて、税金や農場経営の問題にかんする実際的な助言、集会、農業社会にかんする政治問題などについての情報が掲載された。それだけではなかった。同紙は、税務署ともめている予約購読者たちに、それぞれの場合に応じた支援を申し出ていた。ドルジュールは、毎号、小農たちの不安や怒りを表現した、きわめて个性的で論争的な論説を執筆した。新聞は緑色の紙に印刷されていたが、ドルジュールは、やがて、緑色

のシャツの制服を着用した準軍隊組織の「農民青年隊」を結成することによって、その色を農民の抗議運動の象徴として使用することになる。

1930年代中頃には、『西部の農業進歩』紙は毎週2万7,000部を発行するようになっていた⁹⁾。1933年には、ドルジュールは、新聞の財政的基盤を強化しようとして、「農業出版社」を設立した。その主要株主はカルヴァドス県バイユー選出の保守派下院議員ダルクールであり、まだ若かったが、「ベッサン」とよばれるノルマンディーの酪農地域で大きな影響力を発揮していた人物であった¹⁰⁾。

ダルクールが『西部の農業進歩』出版社の主要な出資者となったため、内務省はドルジュールがダルクールのスポークスマンで「王党派の配下¹¹⁾」であると結論し、左翼系新聞は同紙を『アクション・フランセーズ』や「カムロ・デュ・ロワ」と同列視した。この判断は誤っていた。ダルクールは、かれが全株を所有する『バイユー報知新聞』において表明していたように、カトリックで王党派であったが、1937年には、この新聞は、ドルジュールよりド・ラ・ロック中佐とかれの率いるフランス社会党(PSF)を支持した。これにたいして、『西部の農業進歩』紙はその独自の方針に従い、政界

⁹⁾ *Archives Nationales*, BB¹⁸ 2915 dossier «Dorgères-Annexe», Ministère de l'Intérieur à garde de Sceaux, 内務省から法相への報告, 15,637号, 1934年12月21日; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 55, 196, (traduction française) *op. cit.*, p. 93. パスカル・オリーも、イル・エ・ヴィレーヌ県文書館と国立図書館の法定納本明細書を調査した結果、同じ数字に達している。P. Ory, *op. cit.*, pp. 200-201; Pascal Ory, *Le dorgérisme: institution et discours d'une colère paysanne (1919-1939)*, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, XXII, no. 2, avril-juin 1975, p. 172.

¹⁰⁾ *Archives Nationales*, BB¹⁸ 2915, 内務省から法相への報告, 15,637号。

¹¹⁾ *Archives Nationales*, BB¹⁸ 2915, レンヌ市検事総長から法相への報告, 1935年1月29日, 「検事局はドルジュールが王党派の配下であると信じています。」 R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 55, 196, (traduction française) *op. cit.*, p. 93-94.

での宗教活動には反対であり、王党派の主義主張にはほとんど無関心であった¹²⁾。

いくつかの農業紙がその定期刊行を守ることができなかった1930年代の恐慌のもっとも深刻なときにも、『西部の農業進歩』紙は週1回の定期刊行を維持することができた。1933年4月には、ドルジュールは、月刊誌『農民の声』第1号を刊行し、1932年の選挙で議席を失った元モルビアン県選出下院議員ジョゼフ・キャディクと、同誌の編集主幹の仕事を担当した。1934年、キャディクが、議席奪回を願い、フランス農民党（創立者フルーラン・アグリコラ）に接近しようとしてドルジュールの側近グループから離れた（かれは1936年の選挙で議席を取り戻した）ため、ひとりで編集の責任を負うことになったドルジュールは、1937年5月に、同誌の名称を『農民の叫び』と変更した。また、1936年初めには、1932年以来フランス農民党によってソーミュールとトゥールで刊行されていた週刊紙『サントル・西部の農民』（同紙1935年10月3日号の発表によれば、ロワール川流域を中心に2万4,000部¹³⁾が流布していたという）を買収した。

ドルジュールが、大ブルジョワ農業経営者ジャック・ル・ロワ・ラデュリーの援助を受け

て、週刊紙『大地の叫び』をパリで創刊したのも、1936年のことであった。その前年、1935年に、ドルジュールはパリのモンパルナス通り10番地に事務所を借りていた。新しい週刊紙は全国の農民活動家向けに編集され、『西部の農業進歩』紙や『サントル・西部の農民』紙にくらべると技術的助言や地方ニュースがすくなく、写真やユーモラスな漫画が多く載せられた。さらに、全国的な農業問題にかんする記事やドルジュールの論説が掲載された¹⁴⁾。

1936年3月には、ドルジュールは「農民青年隊」すなわち「緑シャツ隊」の機関紙である新しい月刊誌『熊手を立てよ』を発刊し、1938年5月には、南フランスの農民向けの地方月刊誌『農民プロヴァンス』を創刊した。こうして、1939年には、ドルジュールは3つの週刊紙と3つの月刊誌の発行責任者となり、それらの発行をパリの事務所から指揮した¹⁵⁾。また、かれは、南西部フランスの2つの小さな週刊紙『農民行動』（トゥールーズ）と『農民防衛』（オーリヤック）の発行にたいしても、1937年まで強い影響力をもっていた¹⁶⁾。

若きジャーナリスト、ドルジュールが農村のアジテーターとして世間にその名を知られるようになったのは、社会保険反対キャンペーンによってであった。1928年4月5日の法律によって、雇い主と雇用者双方が毎月支払う分担金を基礎にして、雇用者が病気、廃疾、出産の場合には扶助を受ける権利を認めた強制的社会保険

¹²⁾ 1934年12月21日のイル・エ・ヴィレーヌ県知事から内務省への報告 (Archives départementales de l'Ille-et-Vilaine, 1M147a) によれば、ダルクールは『西部の農業進歩』出版社の560株のうち350株（1株500フラン）を所有していた。しかし、1935年4月11日、警察の尋問を受けたドルジュールは、最初、ダルクールが過半数の株を所有していたが、その後、その株所有率は減少し、かれは「この新聞の主人」ではなかったとのべ、ダルクールの影響を小さく評価している。Archives Nationales, BB¹⁸ 2915, dossier «Dorgères-Annexe», ドルジュール尋問調書。一方、ダルクールは、その回顧録 (D'Harcourt, *Regard sur un passé*, Laffont, Paris, 1989) のなかで、ドルジュールについてまったくふれていない。R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 55, 196-197, (traduction française) *op. cit.*, p. 94.

¹³⁾ *Le Paysan du Centre-Ouest*, 3 octobre 1935. ただし、オリーは、法定納本明細書にもとづいて、1938年の同紙の発行部数を2,900部と計算している。P. Ory, *op. cit.*, p. 203.

¹⁴⁾ 『大地の叫び』は、のちにドイツ軍占領下で新聞用紙が割り当て制になったときにも、ドルジュールが発行を継続しようとした新聞のひとつであった。

¹⁵⁾ 第二次世界大戦後、ドルジュールは、1939年には、かれの主宰した新聞の発行部数は合計して30万部に達したと主張しているが、もちろん、この数字は誇張されていよう。Archives Nationales, Z⁵ 127, no. 5815, セーヌ県裁判所検事局ズマン予審判事宛てドルジュールの手紙。R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 57, 197, (traduction française) *op. cit.*, p. 97.

¹⁶⁾ 1937年には、ドルジュールの影響力は低下し、両紙はライヴァル・グループに吸収されてしまう。

制度が制定されたが、1930年4月30日の法律により、この制度は、条文をすこし違えて、農業労働者にも拡大された。農業に拡大された社会保険制度は、多くの賃金労働者を雇用する大農経営にはさしたる困難もなく適用できたが、1人か2人の、たいていは季節労働者、ふつうは家族や隣人の労働にしか頼らない、しかし、数ではもっとも多い小さな家族経営の農民たちは、この制度につよく反発した。かれらの多くはきちんとした帳簿もつけず、十分な資産もたなかった。かれらを怒らせたのは、たんに分担金を支払わねばならないということではなかった。かれらががまんならなかったのは、書類に書き込まねばならないことによって、お役所仕事の罫に捕えられてしまうということであり、社会保険によって、農民とその息子、いとこ、隣人たち、長年、種子まきや収穫の季節に手助けにきてくれていたすべての人たちとのあいだに、役人の手で遮蔽幕が張られてしまうということであった。社会保険のことなど、耳にしたくもなかった。

社会保険にたいする農民たちの激しい怒りは、民衆扇動家にとっては絶好の土壌となった。すでに一部の都市労働者は、社会保険制度によってかれらがなにもえられないのではないかと疑い、分担金の支払いを拒否していた¹⁷⁾。しかしながら、都市労働者のばらばらの反対運動は、農村に起こった社会保険拒否の大きな波とくらべれば、ささいなものでしかなかった。ドルジュールは、1928年12月28日、モルビアン県ヴァンヌで、社会保険に反対するかれの最初の抗議集会に1万2,000人の聴衆を集めることができた。

¹⁷⁾ 共産党は賃金労働者の分担金支払いに反対していた。

¹⁸⁾ Jean Moquay, *L'Evolution sociale en agriculture: la condition des ouvriers agricoles depuis 1936*, thèse, Faculté de droit de l'Université de Bordeaux, Imprimerie de Saint-Denis, Niort, 1939, p. 90. 1935年3月、フィニステール県知事は、内務省に宛てて、同県の農民たちが社会保険制度を受け入れようとはしないと報告し

社会保険反対キャンペーンは、フランスの他のどの地域よりも、西部において成功した¹⁸⁾。西部フランスの広範な農村地域では、何年ものあいだ——一部の地域では第二次世界大戦中や大戦後までも——社会保険制度はまったく機能しなかったのである。西部は、フランスのなかで、賃金取得の農業労働者がもっともすくなく、ほとんど家族労働に頼っていた地域であり、この西部の社会保険拒否運動で、ドルジュールは指導的役割を演じたのであった。

最初の頃は、ドルジュールは、かれ自身の組織をもたなかったので、たいてい、反納税運動の組織「納税者連盟」の演説家として登場した。しかし、まもなく、ドルジュールはかれ自身の組織をつくった。1929年1月2日、ドルジュールは、レンヌのかれの新聞発行事務所に20-30人の農民を集め、すでにウール・エ・ロワール県でアンリ・ドゥブリエとレミー・セディヨによって設立されていた同種の委員会をモデルにして¹⁹⁾、「社会保険防衛委員会」を設立し、やがて、「防衛委員会」の名称をかれ自身が考案したかのように専有するようになった²⁰⁾。

ブルターニュ地方における社会保険反対キャンペーンは、農民たちがその雇用者名を社会保険地方金庫に登録することを義務づけられた期限の直前、1930年2月1日に頂点に達した。ドルジュールとアグリコラ（フランス農民党）は、レンヌのモラン自動車修理工場で大集会を

ている。Archives départementales du Finistère, 1M133; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 59, 198, (traduction française) *op. cit.*, p. 100.

¹⁹⁾ Pierre Milza, *Fascisme français. Passé et présent*, Flammarion, Paris, 1987, p. 126. ウール・エ・ロワール県はドルジュールの本拠地ではなく、同県では、左翼の「労働者農民」の運動が活発で、一方、保守派のあいだではフルーラン・アグリコラのフランス農民党が根を下ろしていた。しかし、のちに、フランス農民党の新聞『サントル・西部の農民』の株はドルジュールによって買い取られた。Cf. Grenadou, *paysan français*, Seuil, Paris, 1966, p. 176.

²⁰⁾ C. Lépine, *op. cit.*, p. 109 sq.

組織した。イル・エ・ヴィレーヌ県知事の報告によれば、5,000人から6,000人の農業経営者と農業労働者からなる群衆が西部の6県から集まった²¹⁾。

社会保険問題は、ドルジュールに直接行動の実習の機会をあたえた。かれは、1933年6月18日、ソム県ブレー地方の酪農業者ヴァランタン・サルヴォードンの財産の公競売を妨害する大衆デモを組織したことによって、はじめて全国的な注目を集めた。サルヴォードンはかれの雇う賃金労働者たちの社会保険分担金の支払いを拒否したため、役所はかれの農場を差し押さえ、かれの支払うべき金額を回収するために、その施設を競売にかけたのであった。ドルジュールは、その妨害活動のために、28日間ペロンヌ（ソム県）の刑務所に入れられ、「ペロンヌの囚人」という名譽ある肩書をえたが、この経験は、ドルジュールに、時の内相カミーユ・ショータンにたいして終生消えることのない憎しみをもたせることになった。

1930年代初頭、恐慌がフランスを襲い、とくに1932年末、小麦価格が崩落しはじめたとき、ドルジュールは、社会保険問題だけでなく、フランス農民の経済、社会、政治状態全体に目を向け、その活動範囲を拡大しようとした。その結果、「納税者連盟」からしだいに離れていった。かれは、なお1933年中は、「納税者連盟」の大衆集会で演説を続けたが、しだいに多くの時間をかれ自身の——もはや「社会保険反対防衛委員会」ではなく、もっと広く「農民防衛委員会」とよばれた——組織に割くようになった。

1932-1933年の冬までには、ドルジュールの

主要な関心は、小麦価格の崩落と、農民を破産から助け出そうとはしない共和制政府打倒の必要に向けられるようになった。つぎつぎと集会をおこなうごとに、ドルジュールはイル・エ・ヴィレーヌ県全域に、さらには西部および北部フランスの多くの市町村（コミューヌ）に「農民防衛委員会」の支部を設立していった。

1935年5月、ドルジュールは、かれの新聞事業のためにパリに事務所を開いたとき、「農民防衛委員会」の最高組織「農民防衛中央委員会」を設立した。ドルジュールはその書記長役を引き受け、委員長の職はイル・エ・ヴィレーヌ県の小自営農ジャン・ボユヨンにゆだねた。有能で忠実な腹心たちへの報償としてかれらに委員長の地位をあたえ、自分自身は書記長や宣伝責任者のような一見下位のポストに就いて、そこから実権を握ろうとしたのであったろう。まもなく、1935年秋には、かれはこれと類似した組織「フランス農民同盟」を設立し、さらに1936年5月には、「農民防衛委員会」の名称を「農民防衛農業組合」と変更した。

このように、上層部でたえず組織の再調整が繰り返されたが、そのことは、ヴァイタリティのしるしというよりは、指導者たちがその組織の短命な性格を暗に認識していたからではなかったかとおもわれる²²⁾。ドルジュール運動の本当の強さは、その地方組織の力いかにかかっていた。このレヴェルでは、精神的なリーダーに恵まれれば、ドルジュールの組織は、それに火をつける情熱の爆発がありさえすれば——すくなくとも、その情熱が通りすぎるまでは——きわめて強力なものになった。しかしながら、ドルジュールの組織は、それがもっとも強力であったときでも、農村経済の日常的現実のなかにはいり込むのは困難であった。当時、農村の日常的な経済活動に持続的な影響力をもっていたのは、「農業組合」であった。ドル

²¹⁾ *Archives Nationales, Papiers Tardieu, 324 AP64*, イル・エ・ヴィレーヌ県知事から首相および内相への報告, 1930年2月1日。集会の主催者は、県知事に手渡そうとした——知事は受け取るのを拒否した——決議文のなかで、集会参加者数を水増しして、1万5,000人と記している。R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 59, 198, (traduction française) *op. cit.*, p. 102.

²²⁾ R. O. Paxton, *ibid.*, p. 61, (traduction française) *ibid.*, pp. 103-104.

ジュールが「農民防衛委員会」を「農民防衛農業組合」と改名したのも、そのことを意識してのことであったろう。

それにもかかわらず、1935年には、ドルジュール運動はフランス農村部、すくなくとも西部と北部では大きな力をもっていたということができよう。1935年初めには、「農民防衛委員会」のメンバーは3万5,000人ばかりを数えた²³⁾。1935年夏に、ドルジュールが徴税妨害のかどで起訴されて有罪判決を受け、農民たちの興奮が高まったとき、メンバーの数は4倍になったとかれは主張している²⁴⁾。ドルジュールの力は、安定した数のメンバーの堅固な組織にあったのではなく、個別的な不満の種のまわりにきわめて多数の農民聴衆を動員できるその能力にあった。ドルジュールの所得税不払い教唆にたいする有罪判決に抗議して、1935年8月25日、ルーアンで開かれた大集会のときのように、ドルジュールの運動がもっとも活発であった時期、かれの演説を聞こうとして集まった群衆は2万人近かったという²⁵⁾。農民大衆を動かし興奮させるかれの能力には、フランス農村の伝統的なリーダーたちにとっても、もはや無視できないものがあつた。

2. 小麦価格の崩落

1930年代の恐慌は農業にも大きな打撃をあたえたが、農業収入の長期的な下落傾向は、世界

恐慌の勃発以前、すでに1920年代末から始まっていた。その起源は、19世紀後半にロシア、オーストラリア、南北アメリカの安価な穀物が世界のすべての大都市に到来するようになった、農産物市場の世界化に求められ、フランス農業は外国産小麦より安いか、または上質の小麦を生産しなければならず、さもなければ保護貿易主義の壁の背後で身を守らなければならなかった。第一次世界大戦は、この傾向に拍車をかけた。大戦中、ヨーロッパ諸国の農民は戦場に駆り出されて犁の代わりに銃をとり、馬は砲兵隊に徴用され、西部戦線の畑には、弾丸がばらまかれ、塹壕が掘られた。ヨーロッパのすべての参戦国は食糧を輸入し、戦前には可能であった農産物輸出を断念しなければならなかった。カナダ、アルゼンチン、オーストラリア、アメリカ合衆国では、それまで未開の広大な平野が穀物の栽培と牧畜にあてられた。これらの南北アメリカやオーストラリアの新しい農業生産者は、戦争が終わっても、ヨーロッパの新しい市場を放棄しようとはせず、一方で、ヨーロッパの農業生産は急速に戦前の水準を回復し、それを越えるまでになった。その結果生じたのが、世界的な農産物の過剰生産と価格低落であった。

フランスは、両大戦間、小麦の輸入国であると同時に輸出国でもあるという逆説的な状況にあった。不作の年には輸入しなければならなかったが、豊作の年には、生産は国内消費と——すでに安価な穀物で溢れた——世界市場への輸出可能量との合計を上回った。また、国内消費の減退が小麦生産者の困難を大きくした。フランス人の食生活はしだいに多様化し、パンの消費量は減っていた。フランスの人口増加率がゼロに近かったことも、国内の小麦消費の減少傾向に拍車をかけた。これらの構造的要因に、2年連続の大豊作という偶然が加わった。1932年と1933年は、フランス農業史上もっとも豊作の年であった。保護された国内市場でも、小麦価

²³⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 10 octobre 1937.

²⁴⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 25 août 1935.

²⁵⁾ ただし、ドルジュールの数字は、いつも疑いの目でみなければならない。かれがあげる最大の数字は、1936年10月11日のロワール・アトランティック県ボンシャトーでの集会の3万人という数字であるが、同県知事は、おそらく同県が静穏であることを示したかったのであろう、同年11月5日の月例報告で、このときの集会参加者数を1万5,000人としている。*Archives départementales de la Loire-Atlantique*, 1M611; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 61, 198, (traduction française) *op. cit.*, p. 104. 実際の数字は、1万5,000人以上、3万人以下ということになろう。

格は崩落した。1930年代半ば、フランスは過剰穀物の海のなかで溺れようとしていた。

フランスの小麦価格は1926年以降下落しつづけ、小麦1キントルの価格は1926年の198フランから1930年には147フランに下落していた²⁶⁾。1930年8月に、時の首相アンドレ・タルデー宛てに手紙を書いたトゥーレーヌ地方の一農業経営者は、農村住民の都市への流出にブレーキをかけるに十分なだけ農民生活を魅力的なものにするには、小麦価格を1キントル300フランに維持することが必要だとのべていた²⁷⁾が、このとき、小麦価格はすでにその水準をはるかに下回っていた。その後も、小麦価格は下落しつづけ、1931年にはわずかに上向いたが、その後は加速的に暴落し、1932年8月から数週間のうちに1キントル160フランから100-110フランに下落した。1933年7月に政府は1キントル115フランという最低価格を設定したが、なんの効果もなかった。1934年には1キントル60ないし70フランにまで下落し、1935年には、多数の農民がかれらの小麦を1キントル55フランで売り捌かねばならず²⁸⁾、買手をみつけることができただけでも満足しなければならなかった。

大農場主たちは穀物を貯蔵して、かれらの貯金をやりくりして生活し、価格の上昇を待つことができた。しかし、倉庫もなく、差し迫った

支払いに追われる小農たちは、穀物をすぐに売らなければならない、種子代や肥料代の支払い、地代の支払い（多くは小作農だった）、生活必需品の購入に必要な金もなく、生活費を切り詰め、やがて肥料商人や地主から借金しなければならなかった²⁹⁾。1930年代の農民の借金は、農業近代化の時期の「投資のための借金」ではなく、「危機のための借金」であった³⁰⁾。多数の穀物農家が破産の運命をたどった。この困難な時期に、フランス政府は、ひとりふたりの日雇い農たちのために社会保険分担金の支払いを押しつけ、税収を引き上げようとしたのであった。戦争から戻って農業を始めるために借金をしていた若い農民たちにとっては、状況はとりわけ耐えがたかった。これらの怒れる退役兵士たちの多くが、ドルジュール運動の隊列に加わったのである。

農民たちの不満は、1933年末に沸騰点に達した。1934年も農村は騒然とし³¹⁾、1935年には、農民たちの反感はいよいよひどくなった。

3. 反共和制運動

農産物価格が雪崩のように崩落していったとき、ドルジュールは、共和制攻撃に農民の不満を利用できるのではないかという考えをいだいた。ドルジュールは、かれの演説に魅了された聴衆の前に、つぎのように語った。もし農民階

²⁶⁾ *Archives Nationales*, F¹⁰ 2180, dossier «Blé», «La politique du blé: le point de vue des producteurs», rapport présenté par Pierre Hallé le 10 juin 1931, Conseil national économique; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp.14, 189, (traduction française) *op. cit.*, p. 27.

²⁷⁾ *Archives Nationales*, 324 AP64, Papiers Tardieu, Lettre de Martin à André Tardieu, 10 août 1930.

²⁸⁾ *Archives Nationales*, Centre des archives contemporaines, B43235, Archives du ministère des Finances, «Révision des baux ruraux. Loi du 2 juillet 1935»; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 14, 189, (traduction française) *op. cit.*, pp. 27-28; 竹岡敬温「世界恐慌とフランス」『大阪大学経済学』第54巻第3号, 2004年12月, pp.24-25; 竹岡敬温「世界恐慌期フランスの政治と経済 1933年の景気後退」『大阪大学経済学』第46巻第1号, 1996年9月, p. 11.

²⁹⁾ Cf. Grenadou, *paysan français*, pp. 171-175.

³⁰⁾ この区別については, Cf. Gilles Postel-Vinay, *L'agriculture dans l'économie française*, in Maurice Lévy-Leboyer éd., *Entre l'Etat et le marché: l'économie française des années 1880 à nos jours*, Gallimard, Paris, 1991, p. 66.

³¹⁾ 1934年5月18日, 元首相のジョゼフ・カイヨーは, サルト県のかれの閑居から, 農相アンリ・クイユに差し出した手紙のなかで, 「どうか, わが田園を静めて下さい。農村はもう騒然としています。これ以上, 田園をかき乱さないで下さい」と懇願している。Musée Henri Queuille, Neuvic d'Ussel (département de la Corrèze), Papiers Henri Queuille, B12 «Correspondance»; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 15, 189, (traduction française) *op. cit.*, p. 29.

級がその力をひとつにまとめることに成功するならば、かれらはフランスの経済、社会、政府のなかでそれにふさわしい地位を獲得するに足るだけ強力な存在になるであろう、法律家、工業企業家、学校教師たちにすっかり籠絡されてしまった恥ずべき共和制は、小麦を生産している農民を犠牲にして、労働者階級に安いパンを供給するよう強制され、英米の自由貿易とドイツの領土拡張主義に反対する議会の長談議に明け暮れて、衰弱しきっているので、農民が十分な圧力をかければ、新しい体制に取って代わられるであろう、共和制に代わってつくられるべきこの新しい体制を、家族的な農業経営をバックボーンにした専制的、労使協調的、家族主義的、保護主義的な体制にするのは、あなたたち農民の役目である、と³²⁾。

この頃のドルジュールがひそかになにを考えていたかは、その頃、内務省と大蔵省がかれを国家にとって危険な存在とみなしはじめた結果、警察が押収した1932年11月-1934年3月の数通のかれの手紙によって知ることができる。とくにサルヴォードン競売事件のときかれと行動をともにしたソム県の2人の農民に宛てた手紙のなかで、ドルジュールは、「力で政権をとる」ために「いたるところで激しいデモを組織する」つもりだと書き、農民運動と反納税運動の2つが「合法性を逸脱した」ひとつの運動にまとめれば、「わが国の憲法の基礎を変えるための全権」を要求でき、「手仕事と家族」を基盤にした新しい体制を樹立できるだけの力をもつであろうとの確信を吐露している³³⁾。

ドルジュールは、かれの支援者の大ブルジョワ農業経営者ジャック・ル・ロワ・ラデュリー

とは違って、1934年2月6日のパリにおけるデモの組織者とはまったく接触しなかったが、この事件から排除されたことは、かえって、同じような規模の農民行動を起こしたいというかれの欲望を刺激した。3月14日、かれは、「早急に政権をとることを決心する」ときがきた、「納税者連盟」と在郷軍人と農民が「家族、手仕事、宗教」を基盤にした共通の政治綱領に合意するならば、「短時日のうちに、われわれの努力を結合して、政権をとれる日がくるであろう」と、仲間のひとりに宛てた手紙のなかで書いている³⁴⁾。

1935年に公開された『熊手を立てよ』のなかで、ドルジュールは、もし、共和制政府が自発的に政権を放棄せざるをえないほど、農民が政府に「ひどいけんかを売った」ならば、「非法的な政権奪取は可能であるとおもわれる³⁵⁾」と書き、「そのために血を流す必要はない。農民は、かれらの数と信念の力によって、政権を奪い取ることに成功しなければならない」と、1934年末の『西部の農業進歩』紙でのべた³⁶⁾。このような反体制的ではあるが同時に慎重な戦術によって、ドルジュールは、西部および北部フランスの農民社会に深く根を下ろしていた秩序感覚と衝突することなく、農民活動家たちの動員に成功したのであった。

1934年春のドルジュールは、『西部の農業進歩』紙上で、「ファシスト」のレッテルを拒否しようとはしなかった³⁷⁾。しかしながら、1935年末には、かれは「わたしはファシストでもな

³⁴⁾ *Archives Nationales*, BB¹⁸ 2914, Perquisition Dorgères; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 62, 199, (traduction française) *op. cit.*, p.106.

³⁵⁾ H. Dorgères, *Haut les fourches*, pp. 177-178.

³⁶⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 16 décembre 1934.

³⁷⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 4 mars 1934. ドルジュールの秘書エミール・ルフェーヴルは、多数のフランス人がファシズムを望んでいる、それが「労使協調的、家族的、地域的価値の擁護の精神」や、また「議会や政府に職をもたない政治活動家たち」を意味するならば、と『農民の声』紙1934年4月号に書いている。*La Voix du paysan*, avril 1934.

³²⁾ R. O. Paxton, *ibid.*, pp. 61-62, (traduction française) *ibid.*, p. 105.

³³⁾ *Archives Nationales*, BB¹⁸ 2914, アンリ・ドルジュールのモーリス・フォワセイ宛て手紙(1933年8月22日)とジョルジュ・ランベール宛て手紙(1934年2月2日)。R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 62, 199, (traduction française) *op. cit.*, pp. 105-106.

ければ、反ファシストでもない。わたしは秩序、正義、所有権を守る」とのべて慎重な姿勢を示し、その後、その姿勢を変えようとはしなかった³⁸⁾。以後、「ファシスト」という語は、ドルジュールにおいては、不鮮明な、しかし、そう呼ばれば「中傷だ」と反論できる形容語に転化した³⁹⁾。

こうして、公的には、共和制を倒すための「節度ある非合法政策」に踏み出したドルジュールは、血を流さずに、共和制の基盤を掘り崩す戦術を選ばねばならなかった。1932年末以来、かれは税金不払い運動のためにたたかってきた。1934年には、2月6日の暴動を引き起こした都市の極右同盟の運動に遅れをとるまいとして、その攻撃手段を多様化させた。1934年11-12月には、『西部の農業進歩』紙上で、何度も、かれは、農民がその巨大な力で「政治屋たちを追放し、政権をとる」ための秘密の「行動計画」があるとのほめかした⁴⁰⁾。やがて、その秘密の「行動計画」とは、国および民間の信用金庫から農民の預金のすべてをいっせいに引き出すことであると判明した⁴¹⁾。

1935年2月22日、ルーアン円形競技場での大衆集会のとき、ドルジュールは「秘密計画」——納税とすべての社会分担金支払いの拒否、信用金庫の預金引出し——をあきらかにした⁴²⁾。

エヌ県選出の下院議員で人権同盟委員長アンリ・ゲルニユは、農民の暴力を鎮圧できないことについて政府に釈明を要求した。政府は、納税拒否教唆を告発するための1933年2月28日の法律にもとづいて、ドルジュールを告訴することに決定し、1935年7月、ルーアン軽罪裁判所は、「集団的納税拒否」の罪を犯したとして、かれとその多くの仲間に有罪を宣告した。

これにたいして、ドルジュールは、フランス農民党、全国農業組合連合、部門別農民諸団体と連携して、農村の保守派有力者エドモン・ジャケとジャック・ル・ロワ・ラデュリーの指導下、「農民戦線」を結成した。この「農民戦線」は短命に終わり、1936年には消滅したが、1935年夏から初秋にかけて、税金不払い（ドルジュールはそれを慎重に「支払猶予」とよんでいた）運動のために、農村の緊張状態は続いた。1935年5月には、政府の告訴に反抗して、ドルジュールは、かれの旧敵、急進党代議士のカミーユ・ショータンの上院選挙当選によって空席になった議席を争うブロワでの補欠選挙に立候補した。ドルジュールは第1回投票で一位となったが、第2回投票では、左翼が結束し、ショータンの占めていた議席をかれが奪うのを阻止した。

国会を悪の巣窟と激しく非難してきたドルジュールが議員の職を求めて選挙に立候補したのは、いかにも奇妙であった。ドルジュールの立候補が、ショータンの議席に挑んでかれの旧敵をいらだたせるためであったのか、それとも自分の政治的立場を強化するためであったのか、それともまた、納税拒否教唆の理由でかれにたいして進められている訴追の手続きをのがれるために、議員特権をえたかったからなのか、いずれにしても、ドルジュールは、第三共和制の議会で「議員として奉仕する」ことはできなかったが⁴³⁾、この立候補によって全国的に

³⁸⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 8 décembre 1935, 14 avril 1936.

³⁹⁾ R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 62-63, (traduction française) *op. cit.*, p. 107.

⁴⁰⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 11 novembre 1934, 30 décembre 1934.

⁴¹⁾ のちに、ドルジュールは、人生の終わり近くに受けたインタヴューのなかで、この農民の預金の大量引き出しにたいして、政府がまったく抵抗できないという事実にかれの注意を向けさせたのは、ヴィシー政権時代、1940-1942年のベタン内閣の官房長官となる若き財務監査官アンリ・デュ・ムーランであったと打ち明けている。Régis Fricot et Pierre Genaitay, *Dorgères et le mouvement paysan, mémoire de maîtrise*, Université de Rennes, 1972, p. 62; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 63, 199, (traduction française) *op. cit.*, p. 108.

⁴²⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 3 mars 1935.

⁴³⁾ 第二次世界大戦後の第四共和制において、ドルジュールは、1956年から1958年まで、イル・エ・

名を知られる人物となった。

1935年夏、ドルジュールは、「緑シャツ隊」という名で一般に知られる行動組織「農民青年隊」を結成した。「緑シャツ隊」をつくるという考えは、ドルジュールが、オー・ラン県コルマル近傍のインゲルスハイム（アンジェルシェーム）でジョゼフ・ビルジュールの「農民同盟」が組織した大衆集会に招かれて演説するため、アルザスを訪れたとき、明確化したようである。このアルザス地方の極右の農民運動、オー・ラン県のおどろ栽培者と酪農家たちのあいだで6,000人ばかりのメンバーを集めていた「農民同盟」は、その集会を護衛するため、緑色のシャツを着用した屈強な若者たちからなる機動隊をもっていた。ドルジュールは、ビルジュールから「緑シャツ隊」のアイデアをえたことを——ビルジュールとの対立によって両者の関係が冷えてしまったあとも——いつも認めていた。フィニステール県ロスボルダンとオワーズ県フォルムリーにはじめて緑色のシャツを着た農民青年隊があらわれたのは、1935年10月初めであり、ドルジュールは、これ以後、「農民青年隊」のメンバーは、その正式の任務につくときは、いつも緑色のシャツを身につけねばならないと発表した⁴⁵⁾。

「緑シャツ隊」は急速に成長した。1935年12月11日、フィニステール県バナレクで開催されたその最初の年次大会は8,000人から1万人の参加者を集め、ジャック・ル・ロワ・ラデューリーら著名な農村名士の支持者たちが演壇から挨拶した⁴⁶⁾。

ヴィレーヌ県選出の下院議員となる。

⁴⁴⁾ 「農民同盟」のメンバーの数とその地理的分布については、Cf. Christian Baechler, *Le parti catholique alsacien, 1890-1939: du Reichsland à la République jacobine*, Editions Ophrys, Paris, 1982, pp. 629-635.

⁴⁵⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 6 octobre 1935.

⁴⁶⁾ 共和国セーヌ県検事から検事総長への報告。Archives Nationales, BB¹⁸ 2914, rapport «Les Jeunesses paysannes», 24 septembre 1936。「緑シャツ隊」の最初の委員長は、ウール県で25ヘクタールの借地を耕作していた

ドルジュール運動の「緑シャツ隊」は、たんに大衆集会を護衛するためにだけ結成されたのではなかった。それは、若い農民たちにかれらの仕事に誇りをもたせ、農業労働者のストライキのときには左翼勢力とたたかい、さらには、税金や社会分担金の滞納を理由とした農場の差し押さえから農民を守らねばならないときには、警察とたたかうことを目的にしていた。

「緑シャツ隊」の若い闘士たちの一隊、かれらの制服、記章、スローガン（「緑シャツ隊」のモットーは「信ぜよ、奉仕せよ、服従せよ」であった）、隊歌⁴⁷⁾などのおかげで、ドルジュールは、1930年代のヨーロッパの他の戦闘的な運動組織と肩を並べることができたのであり、「緑シャツ隊」によって、フランス西部と北部の農村青年たちに、ファシズム時代の大衆運動に典型的な、この戦闘的な新しいスタイルの政治運動に慣れ親しませたのであった。戦後（1975年）公刊された回顧録のかかたで、ドルジュールは、「農民防衛委員会」のなかに「緑シャツ隊」を結成するとき、「それがファシスト団体を編成するのでは毛頭ないことを明確にするという条件で、結成を承認した」と書いている⁴⁸⁾が、同時に、「われわれは、ファシズムの方法、やり方を使用して、共産主義とファシズムとたたかったのだ」という奇妙な論法を展開している⁴⁹⁾。

「緑シャツ隊」を結成した1935年は、おそら

26歳の農民モデスト・レグエズで、翌年の1936年5月の選挙で、反ユダヤ主義の主張によって、ピエール・マンデス・フランスと争い、わずか700票差で敗れて有名となった。Archives départementales de l'Eure, 3M199; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 65, 200, (traduction française) *op. cit.*, pp. 111-112. Henri Dorgères, *Au XX^e siècle: dix ans de jacquerie*, Editions du Scorpion, Paris, 1959, p. 108 は、このときの得票差を「300票差」と書いている。モデスト・レグエズは第二次世界大戦後、ウール県選出の上院議員となった。

⁴⁷⁾ Cf. *L'Almanach 1936 des chemises vertes*, Dusserin, Paris, 1936.

⁴⁸⁾ H. Dorgères, *Au temps des fourches*, p. 198.

⁴⁹⁾ H. Dorgères, *ibid.*, p. 200.

く、ドルジェールの影響力が頂点に達した年であった。「農民戦線」と——1935年秋に「農民戦線」のなかに設立された——「農民行動委員会」をつうじて、フランスの農業団体を動かしていた農村社会の名士たちとドルジェールとの関係はきわめて緊密になった。1935年には、ドルジェールは、全国的規模の農民の抗議運動の指導者として、堅固な権力基盤を掌握するのにもっとも近いところにいたのであり、国家がドルジェールをもっとも恐れたのも、この頃であった。

ドルジェールは、全国のマスメディアの注目を集めつつあった。1935年3月20日には、かれは挿絵入り週刊紙『ヴェー』の取材記事の対象となり、パリの日刊紙『ル・マタン』と『ル・ジュール』に定期的に論説を書き、かれを好意的に論評したいくつもの著作⁵⁰⁾が出版された。高級な光沢紙を用い、広範な読者をもっていた絵入り週刊紙『イリュストラシオン』は、1935年8月18日、多数の群衆を集めたオート・ギャロンヌ県ルヴェルでのドルジェール運動の集会⁵¹⁾に多くのページを割いた。同年4月5日には、ドルジェールは、アンバサドゥール劇場の名高い講演シリーズの講師として招かれた。かれが「農民はフランスを救う」と題した講演をおこなうために舞台にのぼったとき、会場にいたかれの支持者たちは、「カミーユを倒せ！」とカミーユ・ショータンを罵倒する叫び声をあげた⁵²⁾。1935年の春から夏にかけて、ドルジェールはフランス国内政治の重要人物のひとりになろうとしていた。

アンバサドゥール劇場で講演することによって、あるいは、プロワでの下院補欠選挙に候補補することによって、ドルジェールは、農民以外の支持者の期待にも答えられるということを示そうとした。かれはその運動スタイルを変え、その主張を拡大し、パリの聴衆にたいしては、(農村で繰り返していつてきたこととはまるで逆に)都市と農村のあいだに対立はないと明言した。しかし、農民以外の他の階級へ向きを変え、「なんでもありの」この民衆扇動策への転換をドルジェールは気分よく実行することはできなかつた。やがて、かれは、都市や商人への敵意をあおり立てる農村活動家という限定的な役割に喜んで戻るのである。農民の排他的な利害を越えることができなかつたことは、ドルジェールを、政権掌握に成功したこの時代のファシズム運動のリーダーたちからもっとも明確に区別するものであったろう。

1936年5月の選挙で人民戦線が勝利し、政権をとったことによって、ドルジェールは、農村における反共産主義の最強の砦になるという新しい運動理念をみいだした。1936年夏と1937年夏の、パリ盆地とフランス北部の平野の農業地帯における農業労働者のストライキは、フランスがそれまで経験したことのなかつた広範な農村の労働争議であり、ストに見舞われた地域だけでなく、全国の農民のあいだに大きな不安を引き起こした。この2年の夏のあいだ、ドルジェールは、農業労働者のストライキをつぶすためにゲリラ隊の有志を組織し、パリ郊外の共産党支持者の多い「赤色地帯」を封じ込めるため、農民と野菜栽培者の防壁「グリーン・ベルト」をつくるのだと豪語した。1937年には、フランス北部と中部のいくつかの地域で、ド・ラ・ロックのフランス社会党(PSF)と協力して、農業労働者のストライキに反対する懲罰隊を派遣した⁵³⁾。しかしながら、ドルジェール

⁵⁰⁾ Jacques Dysord, *Que veut, que peut la Défense paysanne?*, Denoël, Paris, 1935; Louis-Gabriel Robinet, *Dorgères et le Front paysan*, Plon, Paris, 1937.

⁵¹⁾ この集会の参加者数を『イリュストラシオン』誌は1万人と数え、ドルジェールは2万人といている。L'illustration, 31 août 1935; Progrès agricole de l'Ouest, 25 août 1935.

⁵²⁾ Archives Nationales, BB¹⁸ 2915, dossier «Dorgères-Annexe», 内務省から法相への報告, 1935年4月11日。R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 66, 200, (traduction française) *op. cit.*, p. 113.

⁵³⁾ P. Milza, *op. cit.*, p. 128.

は、実際には、かれが築こうと主張していた反共の砦にはなれなかった。農場と農産物加工場におけるストライキとたたかうために「緑シャツ隊」が差し向けられたが、かれらにはその役割を果たす機会はほとんどなかった。政府と大地主たちが、ドルジュール運動からの実質的な助けを借りることなく、農業経営者の雇用者にたいする権威を回復させたからである⁵⁴⁾。

また、人民戦線に対抗して、ドルジュールは、農業労働者たちをかれの運動に引き寄せようとした。かれは、つねに、自分が、農繁期に雇われる日雇い労働者から大地主までの、農村社会全体の共通の利益の代弁者であると主張してきたが、日雇い農たちの本当の擁護者は、かれの「農民防衛委員会」であり、人民戦線ではないことを証明してみせなければならなかった。1936年5月に「農民防衛委員会」を「農民防衛農業組合」と改称したドルジュールは、その地方支部に農業労働者のための特別部門を設立するよう要求し、労働争議解決のための調停委員会の設置を支持した。ドルジュールは、「緑シャツ隊」の隊員たちの大部分は農場の労働者であるとよくいっていた⁵⁵⁾が、かれらの大部分が自営農の息子か、あるいはかれらの父の土地を耕す借地農であったという意味では、それはまちがってはいなかった。しかし、「真正の」農業労働者は、「農民防衛農業組合」の役員のなかにも、『西部の農業進歩』紙上にほとんど毎号のように公表された少額醸金者のリストにも、ほとんどいかなかった⁵⁶⁾。

1936年秋には、ドルジュールは、かれ自身が農業生産者のストライキのオーガナイザーとなることによって、あらたな活動分野をみいだした。パリ郊外の野菜栽培業者は、野菜価格の下

落とかれらの雇用する労働者との争議のために困惑し、1936年9月28-29日、10月19-20日、12月16-18日の3度にわたって、パリの中央卸売市場への新鮮な果物と野菜の出荷をストップさせた。3度目の最後のストには、地方の野菜栽培業者の一部の増援がえられた。おそらく、ドルジュールは、これらのストライキの唯一の責任者ではなかったが、ストのリーダーシップをとろうとして、パリ中央市場を閉鎖しようとしたデモ隊のまん中で3度にわたって逮捕された⁵⁷⁾。

4. ドルジュール運動はファシズムか

ドルジュールは、ファシストだったのか。

1935年に公刊された『熊手を立てよ』のなかで、ドルジュールはかれの教義の大略をあきらかにしているが、それは労使協調主義と古いフランスの伝統主義の理想に直接結びついたものであった。この本のなかで、ドルジュールは官僚制国家とその自由主義的で都市の資本主義や相場師たちに有利な政策を厳しく非難し、第三共和制下の学校教育と——農村の非キリスト教化に協力し、農家の最良の子弟たちを土地から奪い、かれらを共和制の給費生にし、やがて農村の根から断ち切られた官僚に変えてしまう——小学校教師の役割を断罪している。そして、地方分権的であると同時に伝統的社会構造を尊重する強い国家、王政か「労使協調主義の家族的共和制国家」、第一次世界大戦のときフランス国民を救った農民たちに、かつての特権的地位を取り戻させることのできる国家の実現を呼びかけている。

⁵⁴⁾ ドルジュールは、1936年9月29日、10月20日、12月18日の3度にわたって逮捕され、9月29日の逮捕のあと、「市場における不法行為と違法集会教唆」の容疑で起訴されたが、しかし、検察局は結局、起訴を取り下げた。Archives Nationales, BB¹⁸ 2914, dossier «Notices», dossier «Dorgères», BB³⁸ 2915, dossier 31 A34/36F; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 67, 200, (traduction française) *op. cit.*, p. 116.

⁵⁴⁾ R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 66-67, (traduction française) *op. cit.*, p. 114.

⁵⁵⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 12 juillet 1936, 11 novembre 1938.

⁵⁶⁾ R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 67, (traduction française) *op. cit.*, p. 115.

ドルジェールがフランス社会再建のための柱としたのは、なによりも秩序であり、長い期間に根を下ろした階級制の尊重であり、「永続を保証された強い絆の」家族、規律と労働、伝統的な道徳的価値、将来の国家建設の基礎となる同業組合などであった⁵⁸⁾。このようなドルジェールの教義には、ファシズムとの共通性はあまりなかった。

しかしながら、ドルジェールは、1933年には、自分がファシストであると自負し、つぎのように書いていた。「ファシズムが定着したところでは、独裁政権が農民を社会の第一位の地位に据えている。フランスでは、反対に、農民は国民の最低位に置かれている⁵⁹⁾。」ムッソリーニは、かれの理想であった。「農民たちよ、もしあなたたちがイタリアの農民たちのためにムッソリーニがしたことを知るならば、あなたたちはみな、フランスにもムッソリーニのような人物を要求するであろう⁶⁰⁾」とかれは書いている。ヒトラーにかんしては、ドルジェールは、農産物市場の管理を制定し、家族の相続した農場が借財や破産が理由で差し押さえられることがないように保証した1933年9月のナチスの措置を称賛してはいるが、しかし、この方法が「フランス人には適さない⁶¹⁾」ことも認めていた。

1934年春になっても、ドルジェールは、「わたしとしては、ファシスト的な運動の発展を信

じている⁶²⁾」と明言していた。しかしながら、その後、かれの口はしだいに重くなった。イタリアのモデルへの言及はまれになり、ムッソリーニの労使協調主義のヴィジョンのあまりに国家統制的性格を嘆くようになった。ヒトラーの労使協調主義については、なおさらそうであった。1934年2月6日の暴動直後、ドルジェールがファシストとして攻撃されはじめたとき、かれは「ファシスト」という語を、フランス人の大部分が体制変化を望んでいるという事実を隠すための、共産主義者のたんなる誹謗にすぎないとして退けた⁶³⁾。1936年に、ドルジェールが「ファシスト」というレッテルを拒否したとき、かれはファシズムを非難することも拒否したが、以後、「ファシズムでもなく、反ファシズムでもない⁶⁴⁾」というのがかれのモットーとなった。1930年代末に、ドルジェールが外国の政治体制を称賛したとき、それはフランコ政権下のスペインであり⁶⁵⁾、あるいは工業を信用しないサラザール独裁政権下のポルトガルであった⁶⁶⁾。

1934年夏にドルジェールの「農民防衛委員会」が、他の農民諸団体とともに、「農民戦線」に合流して以後、かれは「農民戦線」の——「家族と手仕事を基礎にした憲法改正」を条件として、共和制を擁護するという——政策要綱に従わねばならなかった。しかし、共和制はフランスに必要な政治体制ではないと考えた1930年代の多くの保守主義者たちと同様に、ドルジェールは「ファシズムでも共産主義でもない⁶⁷⁾」第三の道を探求した。そして、共和制を

⁵⁸⁾ ドルジェール運動の「農民防衛委員会」のスローガン、「労働、家族、祖国」は、のちにド・ラ・ロックのフランス社会党 (PSF) の、ついでヴィシー政権の「国民革命」のスローガンとなった。P. Milza, *op. cit.*, p. 127.

⁵⁹⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 15 octobre 1933.

⁶⁰⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 4 mars 1934; P. Ory, *Le dorgérisme: institution et discours d'une colère paysanne (1929-1939)*, p. 185. オリーは、ドルジェールが、1934年中頃まで、「アルプスのこちら側のムッソリーニ」を自任していた、とのべている。Ibid., p. 187.

⁶¹⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 4 mars 1934. その後、『西部の農業進歩』紙はナチズムの肯定的言及をおこなうことはなかった。

⁶²⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 4 mars 1934. 「ファシズムがなければ、ロシアの大混乱と悲惨がわが国にまで押し寄せてくるだろう。」*La Défense paysanne* (Aurillac), 19 mai 1934.

⁶³⁾ Ernest Lefèvre, Loup-garou et fascisme, *La Voix du paysan*, avril 1934.

⁶⁴⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 14 juin 1934.

⁶⁵⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 23 mars 1937.

⁶⁶⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 2 mai 1937.

⁶⁷⁾ *Progrès agricole de l'Ouest*, 14 juin 1936, 2 mai 1937.

議会のただらした議論や政党政治から浄化するとかれの目的を主張することをやめなかった。「われわれは共和制を守る。しかし、清潔な共和制をである⁶⁸⁾」と、1939年にドルジェールの腹心のひとりが書いている。

ドルジェールの赤裸々なナショナリズムは、かれに、外国の政治体制をいつまでも称賛させてはおかなかった。それに、第一次世界大戦中のドイツ軍のノール県占領や投獄の経験は、かれに強い反ドイツ感情とともに愛国心を植えつけていた。1939年まで、かれは、ドイツとの戦争を、ふたたび農民に「血の税金」を支払わせようとする左翼の策謀だとして、それに激しく反対したけれども、いったん宣戦布告されるや、43歳で志願兵として、アルザスやソム県で戦った。もしファシズムがムッソリーニとヒトラーの体制にたいするあからさまな共感と定義されるならば、「ファシスト」とよぶには、ドルジェールはあまりにもナショナリストであった。

しかしながら、社会主義と自由主義に等しく反対する新しい政治的解決策を1930年代に探求したことは、ファシズムがもっとも勢威をふるったとき、ドルジェールをまっすぐに「ファシズムの磁場」(フィリップ・ビュラン⁶⁹⁾)に引き入れたのであった。「ファシスト」のレッテルを拒否したにもかかわらず、ドルジェールの使った言葉やレトリックは、かれがファシズムに強い関心を抱いていることを示していた。かれは議会主義を激しく憎悪し、民主主義の制度をさげすんでいた。かれの考えでは、フランス革命の落し子である個人主義、産業革命の落し子である集産主義とともに、すべてが悪くなりはじめたのであった。経済にかんしては、かれは自由市場システムを拒否し、職能団体に

よって計画され管理された経済——すなわち労使協調主義——を好んだ。

ドルジェールは、しばしば露骨な反ユダヤ主義者であり、反アラブ⁷⁰⁾でもあった。かれは革命を欲するといっていたが、かれが変えようとしていたのは、政府形態や公衆道徳であり、社会経済的な階級制度ではなかった。かれは法の適正な手続きや法的手段にほとんど価値を認めず、暴力によって敵をおどすことを好んだ。「緑シャツ隊」とその記章、モットー(「信ぜよ、奉仕せよ、服従せよ」)、宣誓⁷¹⁾、麦の束とまっすぐに立てた熊手で飾られた大衆集会の演壇などの、ドルジェールの運動スタイルのなかにも、ファシズムの影響がみられた。しかしながら、1930年代には、あらゆる傾向の政治運動がこのような「機械的連帯性」をつくりだすさまざまな仕掛けを使用したことを認めなければならぬ。

ドルジェールは共和制を攻撃し、「合法性を逸脱した」農民運動への期待を洩らしていたが、結局は、暴力による共和制転覆という敷居を越えようとはしなかった。かれは、1936年末、集会を禁止されたため「農民防衛委員会」を直接行動に引き込もうとした過激派の部下でヒトラーの崇拜者、デソリエ兄弟を運動から締め出した。また、ドルジェール自身がのちに打ち明けたところによると、1935年末に「アクション・フランセーズ」を追われ、「革命行動秘密委員会(カグル団)」の中心グループのひとりとなったウージェーヌ・ドロククルの、共

⁷⁰⁾ ドルジェールは「アラブ野郎とアラブ系のよそ者」を攻撃し、フランスの農民とウール・エ・ロワール県トゥーリ精油所の北アフリカ人労働者とのけんかの責任をかれらになすりつけ(*Progrès agricole de l'Ouest*, 1^{er} novembre 1936)、戦争の場合には、「アラブ野郎たち」を農業労働者として雇用するという提案に不安を表明した(*Le Cri du sol*, 17 juin 1939)。

⁷¹⁾ 「緑シャツ隊」はつねづねドルジェールにたいして宣誓をおこなったが、1935年8月25日のルーアンでの大衆集会では、ドルジェールは、聴衆に「行動命令」に従うよう宣誓させた。*Progrès agricole de l'Ouest*, 1^{er} septembre 1935

⁶⁸⁾ Gabriel Amaubec, *République? Dictature?*, *La provence paysanne*, juin 1939.

⁶⁹⁾ Philippe Burrin, *La France dans le "champ magnétique" des fascismes*, *Le Débat*, no. 32, novembre 1984.

和制国家打倒の陰謀の企てに加担するのをかれは拒否した⁷²⁾。

1940年のフランス敗北後、ドルジュールはペタン元帥を支持し、1940年9月2日の法律によって設立された農民組合の全国評議会メンバーとなったが、ドイツ占領軍には協力せず、最後には、レジスタンス運動に参加した。たしかに、ドルジュール運動は、他の多くの両大戦間フランスの極右同盟と同様に、「緑シャツ隊」のような、ファシズムの衣装を身にまとっていた。また、デソリエ兄弟のような極右過激派の人物が存在していた。しかし、そのイデオロギーはファシズムからは遠く、その行動は都市「ファシズム」の行動からは完全に切断され、イタリアのように、大土地所有者たちの自警団として役立つこともなかった⁷³⁾。

ドルジュールは、かれが人口の一部にすぎない「農民階級」を都市の中産階級の「悪行」にたいして擁護しようとした点で、ファシストのモデルから完全に逸脱していた。国民全体の統一者となるために「階級を横断して」全人口に訴えるという、政権掌握に成功したファシズムのリーダーたちの資質を手に入れることはできなかった。かれはあまりに排他的な農民指導者であり、一圧力団体のリーダーの役割を越えることはできなかった。しかし、かれは、ファシスト政権が農民の自主的管理を認め、農産物価格を引き上げ、広範な農村人口の生存を保護するなら、疑いもなく、それとの協力を惜しまなかったであろう。けれども、ファシズムの現実とは違っていた。ヒトラーとムッソリーニは、軍備拡大とそれが必要とした重化学工業の要請のために、結局は初期の農業政策を犠牲にしたのであり、勝利したファシズムは——自由主義がそうしたように、また、ソ連共産主義がとりわけ手荒にそうしつつあったように——工業の成長に農業を従属させたのであった。

しかし、いずれにせよ、ドルジュールほど、(おそらく、かれの協力者でもありライヴァルでもあった、アルザス地方の「農民同盟」の指導者ジョゼフ・ビルジュール⁷⁴⁾を除いては)多数のフランス農民を第三共和制から離反させ、かれらを民衆主義的、保護主義的、反ユダヤ主義的、労使協調主義的で、かつ独裁的な新しい体制の潜在的な支持者にさせた人物はいなかったであろう。ファシスト・モデルにもっとも近かったとされるフランス人民党のリーダー、ジャック・ドリオは、農村にほとんど支持者をもたなかった(ドリオよりも農村においてドルジュールと競合したのは、1936年に解散させられた「火の十字架団」に代えてフランス社会党を結成し、農村の有力者たちがドルジュールを疎ましく感じはじめたときに、農民の支持を集めようと本気で努力したフランソワ・ド・ラ・ロックであり、1937年以後、ドルジュール運動の活動家や支持者たちがフランス社会党の集いに姿をみせるようになった)。このように、ド

⁷²⁾ ジョゼフ・ビルジュールの「農民同盟」は1930年代にファシズムに似た運動スタイルを取り入れたが、しかし、その農民擁護政策を支持するなら、どのグループ——ときにはフランスのナショナリスト、ときには自治主義者、さらに1938年以後はドイツ支持グループ——とも政治的に手を結んだ。ジョゼフ・ビルジュールと「農民同盟」については、前掲の Ch. Baechler, *Le parti catholique alsacien, 1890-1939: du Reichsland à la République jacobine* のほかに、Cf. Léon Strauss, *Les organisations paysannes alsaciennes de 1890 à 1939: notables et contestataires, Histoire de l'Alsace rurale*, Librairie Istra, Strasbourg et Paris, 1983; Léon Strauss, Joseph-Théodore Bilger, *Nouveau Dictionnaire de biographie alsacienne*, Fédération des sociétés d'histoire et d'archéologie d'Alsace, 1983, III, p. 224; Bernard Reimeringer, *Un mouvement paysan extrémiste des années trente: les Chemises vertes, Revue d'Alsace*, no. 106, 1980, pp. 113-133. これにたいして、ジョゼフ・ビルジュールの息子フランソワ・ビルジュールは、父をファシズムに近い農民運動の指導者とした解釈に激しく抗議している。François Bilger, *Droit de réponse, Saisons d'Alsace*, no. 96, juin 1987, p. 104; François Bilger, Reimeringer, Lerch et Strauss, *ou comment certains "historiens" écrivent l'histoire de l'Alsace et des Alsaciens, Elan: Cahiers des ICS*, XXVIII, nos. 5-6, mai-juin 1980, pp. 9-11.

⁷²⁾ Cf. P. Milza, *op. cit.*, p. 128.

⁷³⁾ P. Milza, *ibid.*, p. 128.

ルジェールは、その「不完全なファシズム」にもかかわらず、ファシズムがヨーロッパで最大の成功を勝ち取ったときに、「フランスの農村ファシズム」の生息場所を占拠するのにもっとも近いところにいたフランス農民の指導者だったのである⁷⁵⁾。

ドルジェールをファシズムのイデオロギー、政策綱領、運動、機能に照らしてどのように評価するかについては、明確な結論に到達することはできないが、ドルジェール運動と最後には政権掌握にいたりついた農村ファシズムとのあいだの最大の距離は、そのリーダーの個性や「緑シャツ隊」の活動よりも、リーダーを取り巻く環境、すなわち、かれが自由にできた政治空間の違いによってもたらされたといえよう。1930年代のフランスの新しい極右の運動は、それが使用した語彙やその所作に限定するならば、イタリアやドイツの同類の運動に似ていたが、しかし、それらが機能した社会やそれらの発展を許した政治危機の性格に目をやるとき、大きな違いが明白になるのである。

フランスの多くの現代政治史家たちによってしばしば主張されてきたように、フランスには土着のファシズムはなかったとか、フランス社会がファシズムというヴィールスにたいして「アレルギーをもっていた⁷⁶⁾」などというのではない。フランス文化のなかにこのように不思議な免疫体が存在していたことを疑わせるに足る、十分な理由があった。ファシズムがその異常な魅力で個人や集団を惑わせたこの時代、ヨーロッパでファシズムの誘惑から免れた国はなく、フランスも例外ではなかった。それどころか、すべてのヨーロッパ諸国のなかで、フランスは、もっとも過剰で華麗な、ファシズム

の、あるいはファシズムに近い知的表現を生み出した国であった。それにもかかわらず、フランスの農村社会には、ドルジェール運動にたいする政治的、社会的、文化的障害が現実存在したことも、事実であった。

ドルジェール運動にたいする主要な障害⁷⁷⁾としては、まず、1936年夏と1937年夏にパリ盆地の農業労働者がストライキをおこなったとき、政府が——そのときの政府は人民戦線政府であったにもかかわらず——憲兵隊を送ったという例にみられるように、国家の介入力が大きかったことがあげられよう。このため、フランスの農民は、イタリアのポー川流域の地主たちのようには、政府から見捨てられたという感情をもつことはなかった。つぎに、フランス特有の現象であったが、左翼の政治勢力が農村によく根を張っていたことである。地中海沿岸の南フランスの大部分には、すでに19世紀初頭以来、共和主義が広がり、ラングドックのぶどう栽培地域は、19世紀末には急進党が社会党支持になっていた⁷⁸⁾。1930年代の恐慌のときには、古くから共和主義を支持するようになっていた地域のフランスの農民たちは、左翼に助けを求めようとしたのであった。

フランス農村の有力者たちの力も、無視することはできない。新しい農民運動の組織が誕生しても、かれらはその支持者を失うことはなかった。これらの農村名士たちのいくにんかは、ひとときは、ドルジェールが役に立つとおもい、かれを支持し、その非合法的活動を黙認したが、しかし、その多くには法治国家の観念が深く浸透し、ドルジェール運動の「直接行

⁷⁵⁾ R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 158–159, (traduction française) *op. cit.*, pp. 257–259.

⁷⁶⁾ Serge Berstein, *La France des années 1930 allergique au fascisme. A propos de Zeev Sternhell, Vingtième siècle*, no. 2, avril 1984, pp. 83–94.

⁷⁷⁾ Cf R. O. Paxton, *op. cit.*, pp. 161–164, (traduction française) *op. cit.*, pp. 262–268.

⁷⁸⁾ モーリス・アギュロンは、ヴァール県が保守主義から共和主義へ移行した時期を1820–1840年としている。Maurice Agulhon, *La République au village*, 2^e éd., Seuil, Paris, 1979. また、トニー・ジュートは、ヴァール県の農村部には、1880年代に社会主義が定着したとしている。Tony Judt, *Socialism in Provence*, Cambridge University Press, Cambridge, 1979.

動」に力を貸そうとはしなかった。フランスの「正当な国家」としての共和制の合法性は、1940年に外国の軍隊がフランスの国土を占領するまで、大きく揺らぐことはなかった。ヒトラーやムッソリーニは、かれらが保守的指導層内部の権力の調停者にとって必要不可欠な人物となったからこそ、政権掌握に成功したのであった。ジャック・ル・ロワ・ラデュリーやその他のフランス農村の保守派エリートたちは、ドルジュールの力を利用するために、一時、ドルジュールをかかれらの世界に迎え入れた。しかし、かれらは、1937年には、ドルジュールに背を向けた。かれらは、ドルジュール運動を利用したが、ファシズム体制をつくりだそうと望んではいず、結局、ドルジュールは周辺部に追いやられたのであった。

また、既存の農民団体が強固だったことも、ドルジュール運動にとって障害となった。農民団体のすべてが1930年代末に共和制を支持していたわけではなかったが、しかし、それらの団体は現行の政治体制に協力し、冒険に乗り出すことを嫌ったのである。さらに、1930年代の恐慌は、フランスでも深刻であったが、ドイツほど破局的ではなかった。たしかに、政府の無策にたいする農民の怒りはひじょうに激しく、1935年にはピークに達したが、しかし、人民戦線が中産階級のパニックを引き起こす半年前の1935年末には沈静化していた。1935年後半における農民の怒りの頂点と、1936年夏における都市の工業の沸騰の頂点とのあいだに1年近くの間隔のあったことが幸いし、1930年代半ばに吹き荒れた嵐から共和制を救ったということができよう。

もっと基本的なことは、フランスの第三共和制が、1930年代にそれが受けたさまざまな試練にもかかわらず、ドイツのワイマル共和制やイ

タリアの自由主義王政と同様な、完全な政治的閉塞状態を経験しなかったことであろう。とりわけ内閣が絶えず入れ替わり、共和制がうまく機能しなかった1933-1936年には、農村の有力者たちも強い危機感をいだいたことであつたろう。しかし、共和制は機能を停止することはなかった。1938年には、ダラディエ内閣のもとで、共和制は息を吹き返そうとしていた。

ファシズムが勝利するには、極右勢力を結集できる統合者の存在が必要であった。しかし、ドルジュール運動は、それが若干の地域で、ある期間、農民にたいして大きな力をもったとしても、その地方的権力を頂点で新しい体制の樹立に結びつける能力をもってはいなかった。ドルジュール運動によってあちこちで農民の動員がおこなわれたが、それらが急速に沈静化した理由も、そこにあった。

もし農村の有力者たちによって一時的に支援されたドルジュールの農民運動が最高潮に達した1935年秋に、農民以外の国民の大部分が同時に第三共和制の政府に敵意を向けていたならば、そして、もし政府の対策がまったくの袋小路におちいていたならば、そしてまた、もし国民の多種多様な不満を「束」にして寄せ集め、すべての反共和制の動きを強力な単一の運動に結集させることのできる人物がいたならば、ドルジュール運動は、その農村における勢力をフランス・ファシズムの運動に提供していたかもしれない。しかし、これらの仮定は、事実によってことごとく裏切られたのであった。1930年代のフランスにおけるファシズムの力を冷静に評価しようとするならば、反共和制連合は形成されず、わずかに、そのいくつかの断片しかみつけないことができないのである。

(大阪大学名誉教授)

Le mouvement dorgériste était-il fasciste ou non? Une étude sur les révoltes paysannes en France des années 1930

Yukiharu Takeoka

En France la crise économique, déclenchée au début des années 1930, a apporté le triomphe du cartel des gauches à l'élection du mai 1932, qui a débouché sur la prise de pouvoir par le parti radical. Pourtant, les gouvernements successifs du parti radical se sont révélés impuissants à vaincre le marasme économique. A la fin de 1933 sont mis au jour les escroqueries de Stavisky, qui ont compromis plusieurs hommes politiques. Les affaires Stavisky ont conduit à l'émeute sanglante du 6 février 1934, l'épreuve la plus dramatique qu'essuyât Paris depuis la Commune de 1871, suivie par la résignation hâtée du ministère Daladier et la formation du ministère de l'union nationale.

Les partis de gauche ont interprété cette émeute du 6 février comme événement suscité par les intrigues des fascistes. Il faut attendre la publication d'un article de René Rémond intitulé «Y a-t-il un fascisme français?» et de son livre sur *La Droite en France* à la décennie 1950 pour que soit remis en question le schéma, hérité parmi les forces de gauche, des impératifs simplificateurs du combat antifasciste.

La parution des ouvrages de René Rémond a renforcé le consensus des historiens universitaires français pour lesquels il n'y a eu de fascisme français que marginal pendant l'entre-deux-guerres.

Mais, la tentative d'interprétation du fascisme français d'un historien israélien Zeev Sternhell (*Maurice Barrès et le nationalisme français*, 1972; *La droite révolutionnaire. Les origines françaises du fascisme*, 1978; *Ni droite ni gauche. L'idéologie fasciste en France*, 1983) qui considère que le fascisme français a été un phénomène de première importance et qu'il a pu dès avant 1914 servir de matrice à ses homologues italien et allemand a ravivé le débat sur l'existence d'un fascisme à la française.

Dans cet article, nous avons étudié les révoltes paysannes dirigées par Henry Dorgères en France des années 1930 et examiné si on peut considérer le mouvement dorgériste comme fasciste.